

主 題：変わらぬ神の計画2

聖書箇所：ローマ人への手紙 11章28-32節

パウロは自分の同胞、また、同国人であるイスラエル人の多くの者たちが、約束の救い主を信じ受け入れることなく永遠の滅びへと向かっている、この現実を心で痛めました。パウロでなくても、私たちも愛する者たちが滅びに向かっている現実が私たちに苦しめます。彼らが永遠の滅びに向かっているという事実は、私たちの心をパウロと同じように痛めるものです。しかし、その中であってもパウロは大きな希望を持って歩いていました。それはこのイスラエルが必ず神さまによって救われるという希望でした。パウロはそのことを旧約聖書のイザヤ書のみことばを引用しながら、この26節と27節に記していました。「イスラエルはみな救われる」と。その確信を持ってパウロは歩いてきたのです。確かに、今はこうしてこのすばらしい救い主に、この福音のメッセージに心を閉ざしているけれども、必ず、神は彼らをお救いになると。

前回、私たちが見てきたように、パウロはその希望を私たちに告白してくれました。「この希望が、この約束が私の希望なのだ。」と。今日、私たちが見ていこうとする28節から、パウロはその希望の説明を続けて行きます。その説明を続けます。そして、32節で今まで学んできたこの1章から11章まで、特に、9章から11章までをまとめています。すばらしいフィナーレがここに約束されています。

☆パウロの希望

A. イスラエルの救い 28-29節

28-29節「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、先祖たちのゆえに、愛されている者なのです。：29 神の賜物と召命とは変わることがありません。」、パウロはここで「イスラエルの救い」について語っています。これまでもそうだったように、彼は再びここでそのことを語るのです。「イスラエルはみな救われる。」ということです。パウロはそのことを今日も教えてくれるのですが、人間と神を対比しながら、特に、この中では「人間の選択と神の選択」とを対比しながらそのことを私たちに教えようとしています。

1. 人間の選択：拒絶 28a節

先ず、私たちが見るのは「人間の選択」です。28節「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、」と記されています。つまり、人間はこの神の福音に対してどのような選択をしたのか？それは「拒絶する」という選択です。パウロはそのことを福音という観点から話をするのです。28節を見て、「彼らは」とはイスラエル人のことです。「福音によれば、あなたがたのゆえに、」、これは異邦人のことです。「神に敵対している者ですが、」、つまり、パウロはイスラエル人が神の与えてくださった福音を拒んでいると言うのです。そのことを彼は「敵対する」ということばをもって表わしています。「敵対する」、「敵対している者」とはどのような人たちのことでしょうか？

1) 「敵対している者」とは？

二つのことが考えられます。それは「主に敵対する者」と「主が敵対する者」です。この両者を見ることが出来ます。

1) 主に敵対視している

主に敵対する者たち、私たちが9章の初めから学んで来たように、パウロはイスラエルの人たちがこのすばらしい救いに背を向けていることを嘆いていました。9：2-3で「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。：3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」と言っています。自分の愛する同国人、同胞たちがこのすばらしい救いのメッセージ、福音を拒んでいる、彼らはこの主に敵対視していると、そのことを嘆いたのです。でも、このように主に敵対する者として生きて来たのは彼らだけではありません。主に敵対する者として生きて来たのはイスラエル人だけでなく、私たちもみな同じです。

パウロは、ピリピ人への手紙3：18で「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」と言っています。また、コロサイ1：21でも「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、」と言っています。聖書は明確にそのことを教えています。ここにいる私たちはみな例外なく、神に敵対する者として生まれ、敵対する者として生きて来たと言うのです。そのことは疑う余

地がありません。そのような者だったのです。パウロはローマ5：10でも「敵であった私たちが、」と言っています。それが私たちの選択だったのです。

2) 主に敵対視されている

でも同時に、「敵対する者」と見た時に、神がそのようにご覧になる、神が私たちのことをご自分に敵対する者だと言われるのです。私たちが神に敵対しているだけでなく、神が私たちをご覧になって、「あなたはわたしに敵対する者だ」と言われるのです。28節の初めに「彼らは」とあり、イスラエル人たちは「神に敵対している者」だと言っていますが、最後には「愛されている者なのです。」とあります。「愛されている」とは受け身です。神が彼らを愛していると言うのです。ですから、この二つのことが対比されているゆえに、イスラエル人は神に愛されているが、神によって敵対視されている者たちだというわけです。

なぜ、神が彼らを敵対視されるのでしょうか？今見て来たように、その生き方が明らかにしているからです。神の敵であるゆえに、神が愛されることをするのではなく神が憎まれることを行ないます。神の敵であるゆえに神が喜ばれることをするのではなく神が憎まれることをします。神のみこころに従うのではなく神のみこころに逆らって行こうとする。そのような敵としての生き方は私たちが選択して来たことです。私たち一人ひとりの生き方、これまでの生き様を振り返って見たとき、神から「あなたはわたしの敵である。」と言われても反論できません。これ程までに神に逆らい続けて来た者であるとパウロは言うのです。

パウロはその現実を知った上で「でも、このような状態はいつまでも続くのではなく一時的なものである。」と言います。彼らは確かに、今は神の敵として生きている、しかし、それが終わる時がやって来る、その希望をパウロは持っていました。

2. 主の選択 : 選び 28b-29節

28節「神に敵対している者ですが、選びによれば、」、つまり、パウロはここで、人間のした選択と神がなさった選択とを比較するのです。神のなさった選択は、そのように敵対している者たちに対して、彼らの中からある者たちを選んだということです。今度は福音の観点から話すのではなく、神の選びの観点から話を進めるのです。ローマ人への手紙11章2節でパウロは「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。」と言っています。神はこのイスラエルの民の中である者たちを選んだ、その人たちのことを決して退けたのではない、彼らのことを忘れ去ったのではないとそうに言われるのです。確かに、神が備えた福音をイスラエルの者たちは拒みました。しかし、神はその中の人たちを選んで、そして、彼らにすばらしい祝福を与えることを約束されたのです。

1) 選びの動機 : 愛 28b節

神が選んだその動機を私たちはここに見ることが出来ます。なぜ、神は「敵」であるイスラエルの者たちを選んだのでしょうか？その動機は「愛」です。神の愛です。一方的な神の愛です。ですから、「選び」と「神の愛」がみことばの中に並んで出て来ます。たとえば、エペソ人への手紙1：4にはこのように記されています。「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」、これは選びのことです。続いて5節には「神は、ただみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられたのです。」とあります。その動機は「愛」だと言うのです。また、1テサロニケ1：4には「神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。」とあり、彼らを選ばれたのは神の愛だと言うのです。

覚えていますか？イスラエルの民がどうして神によって選ばれたのか？モーセがそのことを説明しています。申命記7：7-8をご覧ください。「主があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。:8しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」と記されています。みことばが教えることは、彼らに何か特別のことがあったから、神は彼らを愛したのではない、彼らを選んだのではないということです。神の敵として歩んでいた彼らを、神が一方的に愛してその人たちを選んだと言うのです。

そして、これは異邦人である私たちも同じように愛され選ばれたことを示しています。あなたが神を愛する前から神はあなたを愛して、そして、神はご自身の意志をもってあなたをこの救いへ導こうとされたのです。すべては神の恵みです。すべては神があなたを愛してくださったからなのです。

2) 選びの確実性 : 紛れもない事実、不変 29節

この「選び」というすばらしい神の祝福の確実性について、パウロは29節でこのように言います。

「神の賜物と召命とは変わることがありません。」

「神の賜物」＝これは「いただくに値しない贈り物」です。私たちがいただくに値しないすばらしい贈り物のことです。しかも、これは神の一方的な贈り物です。

「神の召命」＝これは「神の救いへの選びであり、神の救いへの召し」のことです。神学的にはこれを「有効召命」という言い方をします。神が選ばれる、そして、その選んだ者たちを救いへと導く、これは変わることはないと言われたのです。神が選び、そして、神がその人たちを救いへと導かれるのです。なぜ、これは変わることがないのでしょうか？それが神だからです。それが神のご性質なのです。私たちとは違うのです。神が決められたなら神はその通りに為さるのです。神が約束されたことは必ず守られるのです。神がこうすると言われたらそのようになるのです。私たちの信じている神はこのよう方だと言うのです。

詩篇 89 篇ではこのように言われています。34 節「わたしは、わたしの契約を破らない。くちびるから出たことを、わたしは変えない。」、すばらしい約束だと思いませんか？わたしの誓いは絶対に破ることがない、わたしが言ったなら必ずわたしはそのことをする、「くちびるから出たことを、わたしは変えない。」と言うのです。「あのときあのよう言ったけど…」とか「状況が変わってしまって…」、「想定外だったから…」とか、神にはそんなことがないのです。神は言われたことを必ずそのように為さるのです。ですから、パウロの確信は「この神の賜物と召命とは変わらない。なぜなら、言われたことを必ず実現されるから。それが神だ。それが私の神だ。だから、私はその約束に立つ。」でした。

(1) イスラエルは常に神の契約の民である。

イスラエルは神によって一方的に選ばれた契約の民です。神は彼らと契約を結ばれたのです。それゆえに、旧約聖書のみことばはこのような約束を与えます。

・ **彼らを決して捨て去らない**： **I サムエル 12 : 22** 「まことに主は、ご自分の偉大な御名のために、ご自分の民を捨て去らない。主はあえて、あなたがたをご自分の民とされるからだ。」、 **I 列王 6 : 13** 「わたしはイスラエルの子らのただ中に住み、わたしの民イスラエルを捨てることはしない。」、 **詩篇 94 : 14** 「まことに、主は、ご自分の民を見放さず、ご自分のものである民を、お見捨てになりません。」

・ **あなたを忘れない**： **イザヤ 49 : 15** 「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」

・ **大きなあわれみをもってあなたを集める、永遠に変わらぬ愛をもってあなたをあわれむ**：

イザヤ 54 : 1-10 「子を産まない不妊の女よ。喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ。喜びの歌声をあげて叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」と主は仰せられる。：2 「あなたの天幕の場所を広げ、あなたの住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくいを強固にせよ。：3 あなたは右と左にふえ広がり、あなたの子孫は、国々を所有し、荒れ果てた町々を人の住む所とするからだ。：4 恐れるな。あなたは恥を見ない。恥じるな。あなたははずかしめを受けないから。あなたは自分の若かったころの恥を忘れ、やもめ時代のそしりを、もう思い出さない。：5 あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。：6 主は、あなたを、夫に捨てられた、心に悲しみのある女と呼んだが、若い時の妻をどうして見捨てられようか。」とあなたの神は仰せられる。：7 「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。：8 怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。：9 「このことは、わたしにとっては、ノアの日のようだ。わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓ったが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う。：10 たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。」

イスラエルの民は神との契約を結んだ民です。ゆえに、神はこのような約束を与えられたのです。

(2) 先祖たちとの契約を忘れない

また同時に、神は先祖たちとの契約を忘れないお方だと言います。神がイスラエル人の先祖たち、アブラハム、イサク、ヤコブとの間に結んだ契約を決して忘れないと。モーセはこのように言っています。出エジプト 2 : 24 「神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」、レビ記 26 : 42 「わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こそう。またイサクとのわたしの契約を、またアブラハムとのわたしの契約をも思い起こそう。」、イスラエルの民がエジプトの地であって叫んだときに、苦しみの中で叫んだときに、神は言われるのです。「わたしは約束をちゃんと覚えている。」と。この箇所を読むと、神がイスラエル人の嘆きを聞いて「ああ、そうだった。わたしはそのような約束をしていた…」と神がそのことを思い起こされるように思いますが、そうではありません。私たちに神のことが分かるように表現されているのです。神は約束を守られるのです。神は約束をすべて覚えておられるのです。神が「こうする」と言われたなら、必ず、そのようにされます。それが私たちの神です。そし

て、そのことを私たちの信仰の先輩たちは信じて来たのです。

パウロは「イスラエルはみな救われる。」と言いました。その確信がどこにあるのでしょうか？Ⅱ列王記13：23に「主は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のために、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで彼らから御顔をそむけられなかった。」とあるように、彼らは選ばれた者たちだ、神が彼らを選ばれた、今は福音に逆らっているけれど、彼らは神によって選ばれた者たちであり、そして、神はその約束を曲げられる方ではないと、それがパウロ自身が希望を失わなかった根拠だったからです。

B. 救いは主のあわれみによる 30-32節

そして、30節から32節を見ると、この救いはすべて神のあわれみだと言っています。30-31節「ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、：31 彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。」

またここでも、人間と神とを対比しています。「主に対する人の態度」と「人に対する主の態度」を対比しているのです。

1. 主に対する人の態度 30-31節

異邦人の態度とイスラエル人の態度が記されています。

1) 異邦人の態度＝不従順 30節

30節に「ちょうどあなたがたが、」とあります。これは異邦人のクリスチャンたちです。「かつては神に不従順であったが、」と書かれています。異邦人の神に対する態度は「不従順」だったと言うのです。私たちはそうだったと言うのです。

2) イスラエル人の態度＝不従順 30-31 a節

「今は、彼らの不従順のゆえに、」とあります。これはイスラエル人のことです。イスラエル人の「不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、：31 彼らも（イスラエル人）、今は不従順になっていますが」と、イスラエル人の選択は「神に対する不従順」だと言うのです。異邦人であろうとイスラエル人であろうと、人間が選択したことは「神に逆らうこと」だったのです。「不従順」とは「不信心、不信仰」です。また、「意図的に頑なに信じることや従うことを拒むこと」です。神に従って行くのではなく、自分勝手に生きていこうとする生き方です。

パウロはこのローマへの手紙8章7-8節で「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。：8 肉にある者は神を喜ばせることができません。」と言っています。つまり、人間の問題は、神に従うよりも自分の思い通りに生きていきたいとすることです。分かっているけれど、私は私のやりたいことを選択します、自分の好きなことを選択しますと、これはパウロが言ったように「肉にある者」です。このように自分勝手に生きている者は神を喜ばせることができないのです。不従順です。神に従おうとしないのです。神のみこころに従うよりも、自分の好きなように生きていきたいからです。私たちはそのように生きて来たのです。今も、その葛藤は救われた私たちのうちに残っています。神のみこころに従っていくよりも、自分の考えに沿って生きて生きたい。神に逆らって神のことなど全く知らない人たちの生き方の方が何かすばらしく見えたり、そこに何かすばらしい魅力を感じてしまったりして、私たちの戦いはいつも、主のみこころに従うか、自分のやりたいことをやっていくかです。従順か不従順かのどちらかです。

そのように、神に逆らい続けて来た者たちに対して、それが異邦人でもしかり、また、イスラエル人でもしかりですが、神の態度はどうなのでしょう？

2. 人に対する主の態度 30-31節

1) 異邦人に対して

30節「ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、」、あわれみを受けたのは異邦人です。異邦人のクリスチャンであるあなたです。彼らの不従順のゆえに、イスラエルが神に逆らったゆえにこの恵みが私たちに及んだということはもう私たちはすでに見て来ました。そして、私たちのように神に逆らって来た者たち、不従順であった者たち、先ほど見たように、神の敵として生きてきた者が、神から一方的にあわれみを受けたのだと言うのです。（11：11, 12, 15にも記されています。）

2) イスラエル人に対して

また、イスラエルに対しても同じです。31節「彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。」、イスラエル人が今不従順になっているのは、異邦人が受けたあわれみによってイスラエル自身もあわれみを受けるためだと

言うのです。こうしてパウロは、神の敵であり、神に逆らって来た不従順な異邦人があわれみを受けたように、このイスラエルに対して、今は確かに神に背いているけれど、神は再び彼らにあわれみを与えるということを神は約束されたのです。

3) その理由

異邦人と同様にイスラエルも神のあわれみを受けると、なぜでしょう？みことばが何度も繰り返して教えています。それはこの主があわれみ深いお方だからです。いつくしみ深いお方だからです。それが私たちの神なのです。もちろん、私たちの神は聖く正しい方であり、私たちの罪をすべてご存じであり、そして、その罪に応じてさばきを下されるお方です。私たちの罪が赦されたということは感謝なことです。でも、赦されていない人たちの罪はすべて神の前に明らかであり、その罪に沿って神は正しい公平な審判を下されます。しかし、この神はあわれみに満ちあふれたいつくしみ深い神です。

詩篇 86 : 5に「主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。」とあります。私たちのように罪深い者が神の前に救いを求めるなら、神は与えてくださる。赦しを求めるなら神は赦してくださる。そのような神だということです。感謝なことです。あなたのすべてを知った上で、あなたが神に敵対する者であることを知った上で、神はあなたに赦しを与えてくださるのです。不従順な者であることを知った上で神はあなたに赦しを与える。それ程、神はいつくしみ深いお方だと言うのです。

ですから、パウロは繰り返してこの「あわれむ」ということばを記しているのです。確かに、「あわれむ」ということばを国語辞典で見ると、「かわいそうに思う、不憫に思う」という訳が出て来ます。でも、皆さんもよくご存じのように、ここで言う「あわれみ」はその意味以上のものです。この「あわれみ」ということばを表わすギリシャ語は二つあります。一つは「オイックテイロー」ですが、もし、このことばが使われているなら、それは「心の中にあるあわれみの感情」を表わすことばです。その人の心の中にだれかに対してあわれみの思いを抱いているということです。そのような思いが心にある状態を表わすときにこのことばを用いるのです。

でも、この箇所にはそのことばが使われていないのです。ここで使われているのはもう一つのことばである「エリオオー」です。このギリシャ語は「人の悲惨、人の苦痛、人の不幸に対して同情心を抱くこと」であり、それだけでなく、「これらの同情心は特に、ことばよりも行ないによって現わされる」のです。つまり、心にかわいそうという思いを抱くだけではないのです。苦しんでいる人たちに同情心を抱くだけではないのです。そこから行動が生み出されていくということばです。困っている人に、苦しんでいる人に何かをするということです。ここではそのことばが使われているのです。

つまり、神はあなたの霊的状态をご覧になったのです。あなたが神の敵として生きていること、神に逆らっていること、神に対して不従順であること、永遠の滅びに向かっていること、そして、神はそれに対して心を痛めたのです。あなたの罪を見てかわいそうだと心で思っただけではないのです。具体的に、行動を起こされたのです。救い主イエス・キリストを送り、その方をあなたの代わりに罰して、あなたに罪の赦しを与えようとしたのです。これが神のあわれみです。こうして、神はあなたに対する愛を明らかにされたのです。ことばだけではなく行ないをもって為されたことです。

「あわれみ」に関して、イエスはこのような「たとえ」を与えておられます。マタイの福音書 18 章にあります。王が自分のしもべたちと清算しようと思って一人のしもべを呼びます。このしもべは王から 1 万タラントの借金をしていた者でした。1 タラントは 6000 日分の賃金です。ですから、1 万タラントは、 $10,000 \times 6000 = 60,000,000$ 、到底、返済不能な金額です。これだけの借金をしていた者が王の前に引き出されたのです。王は最初に言います。25 節「自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように」と。しかし、このしもべが『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします。』と主人の前にひれ伏して懇願するので、27 節「しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。」のです。今、私たちが学んでいることはそういうことです。主人はただかわいそうに思っただけではないのです。それを行動にしたのです。ところが、このしもべはどうだったか？今度は自分が 100 日分の賃金である 100 デナリを貸している仲間に会いました。この仲間も同じように彼に『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから。』と懇願します。でも、彼はそれを聞き入れませんでした。そして、ご存じのように、そのことを聞いた主人はこの悪いしもべを獄吏に引き渡しますが、そのときに主人はこのように言います。33 節「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』と。「あわれんで」とあります。これと同じことばが今私たちが見ている箇所に出ているのです。

神のあなたに対するあわれみがよく分かりますでしょう。私たちはみな神の敵です。みな神に逆らっているのです。救われたと言っても、私たちの歩みは神に逆らうことの多い者です。もし、神があわれ

みに富んだ方でなければ、私たちは一瞬の内に滅ぼされています。私たちはみな地獄に送られて、だれ一人としてそのさばきに対して文句を言えません。私たちには永遠の地獄が一番ふさわしいところです。でも、この神はあわれみ深い方であって、あなたのすべての罪を知った上でアクションを起こされたのです。あなたにすばらしい救いを備えてくださったのです。あなたを救うために、ご自分のひとり子イエス・キリストをあなたの身代わりに殺し、そして、彼を死からよみがえらせたのです。このイエスによって、信じるすべての者を救おうとされたのです。確かに、神はあなたのその罪深さを知り、あなたに同情し、そして、あなたのためにアクションを起こしたのです。パウロが言っているのはこの「あわれみ」のことです。パウロが信じていたことは、異邦人がこのあわれみによって救われたように、神は同じあわれみをもってイスラエル人を救うということです。

もう一度ローマ書 11 章 31 節を見てください。後半に「**今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。**」とあります。「今や、」ということばが出て来ます。パウロはイスラエル人がみな救われるという出来事が今まさに起こるのではないかと信じていた、そのことを伺い知ることができます。今まさに、イエスが帰って来られて、最後の異邦人が救われて、そして、イスラエル人たちが救いに与るといふ、そのときが今起こるのではないかとそのような思いをもって歩んでいた、それが 31 節に出て来ます。もちろん、それがいつ起こってもおかしくありません。イエスは今日帰って来られてもおかしくないのです。パウロはそのことを確信して、そのことを待望しながら歩んでいたのです。その様子がここに見て取れます。

あなたが救われたのは 100% 神のあわれみだと。神があなたをあわれんでくださらなければ、あなたも私もこの救いに関する希望もないし、そして、今私たちは間違いなく永遠の地獄に向かっています。神のあわれみ、そのことを繰り返してパウロは人々に悟らせようとするのです。

3. まとめ 32 節

最初に話したように、この箇所は 11 章のまとめでもあり、9 章から 11 章のまとめでもあります。そして、もっと言うなら、1 章からパウロが語って来たことのフィナーレがここに出て来ます。「**なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。**」

1) 人の選択

今見てきたように、不従順こそが私たち人間がした選択でした。神がなさったことは「**すべての人を不従順のうちに閉じ込められた…**」でした。この「閉じ込める」というのは囚人とするということです。神はなぜそのようなことを為さったのか？それは罪人が主に逆らい続ける選択を捨てなかったからです。不従順な生き方を捨てないからです。そのことをパウロはこの 1 章から教えてくれました。すでに見たように、私たち人間は創造主なる唯一真の主なる神よりも、自分たちにとって都合の良い神を造り、その偽りの神を崇める選択をして来ました。私たちが手を合わせてきたものは創造主ではなかった、偽りの神々でした。また、自分を創造してくださった主なる神の計画に沿って生きるよりも、自分の考えや欲のままに生きる選択をして来ました。「**神さまになど従いたくありません。自分の人生だから好きに生きます。**」と、そのように生きて来たのです。

そして、神の備えてくれた救いよりも自分たちの考える救いを選択したのです。そこに救いなんかありません。しかし、それでも人間は神の備えられた救いではなくて、自分たちに都合の良い、自分たちの考える救いを選択して来たのです。私たちが不従順を選択するゆえに、私たちがそのような生き方を選択するゆえに、神はそこに私たちを閉じ込められたと言うのです。囚人とされた、だから、私たちは一生懸命もがいても、どんなに頑張っても、この罪の中から抜け出す術を見出すことができません。どんなに頑張っても私たちは自分を変えることができません。どんなに努力しても私たちは神に喜ばれる者になることはありません。私たちは囚人なのです。捕えられているのです。自分の力でそこから逃れる術はないのです。私たちの誤った選択のゆえに、このような結果が私たちのうちに起こったとパウロは言うのです。神が悪いのではありません。不従順な歩みを選択したのは私たちです。神に敵対する選択をしたのは私たちです。その結果、その罪の囚人として、私たちはそこから自分自身で逃れる術のないそのような者になってしまったのです。

2) 神の選択

その後を見てください。神は何をなさったのでしょうか？「**神は、すべての人をあわれもうとして**」とあります。「**すべての人にあわれみを示すために**」とも言えます。また、別の言い方をすれば、「**すべての人が神のあわれみに気付くために**」です。主は異邦人が不従順だったときに、イスラエルにあわれみを示されました。次に、イスラエルが福音を拒んだときに異邦人があわれみをいただきました。そして、主はイスラエルに対して再びあわれみを示されるということです。これらのことを通して、「**救いは完全に主のあわれみだけに基づいた主の恵みであることを明らかにされた**」のです。救いは神の恵み以外、

何もものもないのです。100%神の恵みです。100%神のあわれみです。あなたが何かをしたからではありません。あなたが何かを達成したからではありません。あなたが良いことをしているからでもありません。この救いは100%神の恵みなのです。パウロはそのことを言うのです。私たち信仰者はそのことを覚えていなければいけないと言うのです。

ルカの福音書18：13に「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」とありますが、「あわれみ」と記されているみことばを見ましょう。

マタイ9：27「イエスがそこを出て、道を通って行かれると、ふたりの盲人が大声で、「ダビデの子よ。私たちをあわれんでください。」と叫びながらついて来た。」

マタイ15：22「すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」

マタイ17：15「主よ。私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでおります。何度も何度も火の中に落ちたり、水の中に落ちたりいたします。」

マタイ20：30「すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」

マルコ10：47「ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。」

ルカ17：13「声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」と言った。」

救いに関して、神は救いをすでに備えてくださった。主イエスの身代わりの十字架と死よりの完全な復活により、救いは備えられました。その救いを心から受け入れることです。しかし、救いは神のあわれみによる恵みのみわざであることを私たちは忘れてはならないのです。ルカの福音書16：24にも「彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』」とあります。救いのチャンスがあるうちに、神のあわれみによる救いをいただくことです。

クリスチャンの皆さん、今確かに、私たちは天国に国籍を持ち、死んでも私たちは天国で神とともに永遠を過ごすという希望をもって生きています。それはすばらしいことです。確かに、その約束を神はくださった。しかし同時に、私たちが覚えなければいけないことは、このような祝福をいただき、永遠の備えもできた、そして、今も天国民として神とともに生きる人生を過ごすことができる、この祝福に与ったのは100%神のあわれみだったということです。だれ一人として、このような祝福をいただく資格はないのです。だれ一人として、このような懇ろな扱いを受ける資格のある者はいないのです。神があわれみ深いお方であり、神がいつくしみ深いお方であり、どういうわけか、神はあなたを選んでこの祝福をあなたに与えたと言うのです。

それなら、私たち信仰者はもっとこのことを感謝しなければいけないし、もっとこのことを喜ばなければいけないと思いませんか？100%神の恵みです。あわれみです！あわれみなのです。もちろん、この32節には「すべての人をあわれもうとして」と記されています。ある人たちが考えるような「万民救済論」ではありません。つまり、すべての人が救われるということを言っているではありません。その証拠は、すでに私たちが見て来たように、すべてのイスラエル、イスラエルがみな救われるということは、全人口のすべてが救われるということではありません。神はその中で人々を選んでおられるのです。では、この32節でパウロが言わんとしたことは何でしょう？

すべての人はこの神のあわれみによって救われるのであって、そこに何の区別もないということです。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、人はみな神のあわれみによって救われるのです。私たちがこのローマ書の学びを始めた時に、ローマ書3章22節のみことばを見ました。「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」と、まさにこのことを私たちに思い起こさせてくれます。人種が何であれ、国籍が何であれ、年齢も性別も、どんな背景がであろうとなかろうと、私たちはイエス・キリストのあわれみによってこの救いへと招かれるのです。

私たちクリスチャンは、このような神を崇めるために救われた者たちです。「主よ、あなたのあわれみによって、一方的なあわれみによって私にこんなすばらしい救いをくださった。私はあなただけを誉め称えます。」と、それがあなたです。それがあなたであるはずで。「救い」、これは神がくださったすばらしい贈り物です。私たちが努力して勝ち取ったものではありません。何もできなかった私たちに、主が備えてくださり主が与えてくださったものです。だから、私たちはその方だけを誉め称えるのです。

そして、そのことが11章の最後に出て来ます。賞賛に値するお方はただ一人です。人々から誉めら

れるお方はただ一人です。こんなあなたや私を、そして、このような私たちのすべてを知った上で、救いを備え、その救いへと招いてくださったこの主です。信仰者の皆さん、そのためにあなたは生きているのです。この方を誉め称えるために、この方に感謝をするために、そして、この方のすばらしい救いを人々に証するため、そのために救われたのです。そのために生かされているのです。問題は、そのためにあなたが生きているかどうかです。もう一つ言えば、そのためにあなたが生きようとしているかどうかです。どうぞ、そのように生きることです！そして、この神だけがすべての栄光をお受けになるのです。その方に私たちの感謝を現わしていくことです。この方はそれにふさわしい唯一のお方です。あわれみに満ちあふれた、いつくしみ深い私たちの神です。その方を心から誉め称え続けることです。

《考えましょう》

1. 「神のあわれみ」をあなたのことばで説明してください。
2. 32節でパウロが教えようとしたことは何ですか？
3. 「神の賜物と召命とは変わらない」という約束によって、あなたが得た確信を記してください。
4. 今日の学びから、あなたの主について教えられたことを記してください。